『國民新報』1939年12月24日

[冬季雜筆]　歳暮雜感

李光洙

　はとかとかふ、のうつりかはりは人にずるつもりですが、歳のとかとかふなことにはどをつてひました。からさうなつたのかと、おきになっても、一寸おにしますが、もう前からのであります。

　子の時にお正月がちしかつたのはふまでもありませぬ。何お正月がしかつたのか、それはにな所でありませうが、等は無にお正月をしがる方でありました。ところが今ではど、そんなものにがないのです。

　年前に一度、でのをきながら一でを詠んだりしたことがありました。見にられた、のが綻びて、かな薫をしてりました。これがに取つて、のの思出であります。

　三四がしたり、がつたり、に融けがしたりしてります。にはが上り、にはがきらめきます。だからとつて何んのもありませぬ。

　家内がで、くをしてりますが、大晦日だと云ふんでがけろりと直るともへませぬ。風邪でを出した、子のがまりました。等は、今いくつたらお正月だ、お正月になれば、八つになるんだ、六つになるんだ、おにいちやんが十二になるんだと、日に何ともなくにをかせます。しがと來てるから、等にはおやしいおべゝもうかとはれます。

　年――もつとも市だけですが――のともふべき附大賣出とふ物が、今はないさうです。時のだと受け取れますが、それにしても毎日の上高は、に年のそれをしてると新がつてるのは、つていことやら、いていことやら。まだまだですねとふべきだらうとひます。

　先日がてつたことがありました。のを二もしたが一もられぬので、むなく粘米を買つて來て、凡二日間おでらしたまではかつたが、やつとのがりかけた子のが上がつたのでいたしました。おを食べると子はを出すとふことをたる家内からかされてはふはふの態で町中をつて、やつといくらかのお米にありつきました。これもでしょうか。

　人からられたが、もう四寸も五寸も々とびてます。をけるのももないことぢやないでせうか。一なんて、のなものにふさはしいではありませぬ。一をなんとつて、あんな上な、なをつてくれたのか、その人のがれませぬ。には々やですね。年も入中に、チウリツプだの、ヒヤシンスだの、だの、グラヂオラスだの、にもないを受けました、いづれも私にはのいものでありました。たゞ北山の、だも融けぬから取つて來たとふだけはかしいと思ひましたので、をんだこともありました。はには、かゝはりのないものでせうね。

　今年は約で、のがくなるとふので、四年の男の子が、ふ分スケートが出來るんだと力んでをります。あれもどうしたことか、お正月そのものには大してを持たぬです。要するに朝の家では、金をしてには、のやをじなくなつたのではないでせうか。お分が、分く、朝の家からはしたにはれます。

　では大とふ事がありますね。年二六月と大とに、前にいて去間の身やのけがれを祓ってくことであるが、さうすれば、元には『あな手伸し』『あなさやけし』[[1]](#footnote-1)のきで、新播き直しの生を始めるとふことになつてとか新年とかふが、それこそはつきりとを持つて參りませう。しくじりがちの身、けがれしのが身、何時までもくよくよとのさだけではまらぬ。日祓つていたのだ、今日からはさやけきの身なのだ、と出直すことは、人間としてに要なことだとひます。かうふなからすれば、はにのいもので、この一年中のが身のを、であらうと、であらうと、すつかりしして、一一をも新年には持ちさないと云ふはにましくしいもののにはれます。りたものもす、かつたものもあやまりおをする、そして人間のしさに、分ではなしにした々のけがれ、々の事までもに祓つていて、上りのなさつぱりした持になつて、のに耳をましつゝ、々のおにしたがつて、はに、はに、じつとりむ、これはにな、しいことだとひます。

　これで子のぜられたのがげますか。御下さい。

1. 「手伸し」は「たのし」と読む。「あな、たのし（ああ楽しい）」、「あな、さやけし（ああ清らかだ）」は、日本神話で天照大神が天岩戸から出て世界に光がもどったときに神々の発した言葉。 [↑](#footnote-ref-1)